

土屋陽介 著

『僕らの世界を作りかえる
哲学の授業』

青春出版社、2019 年

224 頁、900 円（税別）

哲学対話や子どもの哲学といった世界への最良の地図というのが、本書を読んだ率直な感想である。哲学対話や子どもの哲学をほとんど知らない人でも、本書を読めば、これらの活動の歴史や現状、そして、やり方を知ることができる。

著者は中学校・高等学校で「哲学科」を担当している。その希有な立場から、著者は「フィロソファー・イン・レジデンス（学校駐在哲学者）」と自称している。著者の勤務先のように哲学科を置く小・中学校は、国内にはほとんどない。そこで、著者は「道徳科」の授業を哲学対話の時間として活用することを提案する。本書を読めば、学校に哲学者が駐在していなくても、哲学対話を実施できるようになる。主体的で、対話的な道徳科の授業をどのように作ればいいのかと頭を抱えている先生にとっては、本書が一つの参考になるだろう。

著者は、哲学対話に子どもたちの「知的徳（intellectual virtues）」を育む効果があることを心理学者との共同研究で明らかにした。「知的徳」とは、簡単に言えば、思考する上での理想的な態度のことである。反論に耳を傾けつつも、確固たる証拠がある場合は胸を張って自説を主張する、そのような態度が「知的徳」である。「知的徳」は、教育

の分野ではまだ馴染みのない言葉である。それゆえに、著者の「知的徳の教育」に関する研究が、さらに敷衍された形で読めるようになることを期待している。

本書では、世界各地の子どもたちの哲学の歴史の変遷と現状も紹介されている。子どもが哲学をするという、どこかハイソな匂いがするかもしれない。しかし、本書を読んでもみると、子どもの哲学はハイソとは対照的な位置にいたることがわかる。多様な人種・文化が入り乱れる学校で、貧困問題に苦しむ地域で、子どもの哲学は行われている。哲学対話を通して、子どもたちは、自分たちの前に立ちだかる問題にがっぷりと取り組む。それはハイソというよりも、むしろ、泥臭さを感じる。

あくまでも、本書は哲学対話や子どもの哲学という世界への「地図」である。地図には、最低限の情報しか載っていない。さらに詳しく知るためには、関連文献を読む必要がある。その際、本書巻末の参考文献が手掛かりになる。ただし、参考文献も読者にとっては哲学対話へのガイドブックに過ぎない。地図やガイドブックは「現地」ではない。本書を読めば、哲学対話の現地に赴きたくなるだろう。

辻和希（信州豊南短期大学）